

(1) 1975年5月15日発行

游撃

沖解同アピールに応じ大衆的決起を

5・15沖縄闘争

第三次琉球処分の実体化、沖縄の軍事的経済的「前線基地化」を日本プロレタリアートと沖縄人民の団結によつて粉碎し、インドシナ人民の革命戦争に応えよ！

インドシナ半島に於ける米帝国主義を中心とする反革命勢力の敗北が決定的となつた現在、沖縄は再びその重要性を増しつつある。「沖縄の前線基地化阻止」「沖縄返還粉碎」をスローガンとして闘つた70年安保闘争の敗北以降、日本一沖縄の革命勢力－潮流はそれ以降の日帝の沖縄前線基地化と同化政策に対し様々な位相から闘争を開いてきた。日本に於ける沖縄人労働者の就職差別問題、沖縄の金武湾開発問題、海洋博の開催問題等々に対する沖縄一日本人民の連帯した闘いが闘われ、日帝の沖縄政策の本質を白日のもとにあばき出してきた。だが、海洋博の開催、皇太子の派沖が計画され、その実行が時間の問題になつた今、沖縄人民と日本プロレタリアートの連帯した闘いが、そうした個々の闘いの地平を踏まえ、巨大な闘いとして組織され日本帝国主義のアジア反革命秩序形成と対決することが全人民的に要請されている。われわれは、関東沖縄解放同盟（津）の呼びかけに応じ、全人民的な政治闘争として五・一五沖縄闘争として五・一五沖縄闘争を開い抜き、一〇・一天皇派米粉碎を射程に入れつつ、七・二〇皇太子派沖・海洋博粉碎闘争の一大爆発を獲ちとらねばならぬ。

沖縄問題はいさまでなく、ベトナム解放闘争を中心とする東アジアの階級闘争と密接に結びついている。

心とする東アジアの階級闘争と密接に結びついている。

沖縄人民の歴史的一階級的な問題である。したがつて

民族問題の位相を含む日米のアジア新秩序体制の問題そのものであるのだ。我々は、すでに、情勢の把握の基本軸として、かつての革通主義的な発想に対する自己批判を鮮明にし、問題を階級闘争の問題として提起するといふ作業を行つてきた。

たとえば「游撃四号」は現代世界を30年代とのアナロジーとしてとらえようといふ思考を次のように整理した上で批判を行なつてゐる。

「図式的に整理すれば、アメリカの相対的地位の低下→ドル・ポンド体制の崩壊→アメリカのモンロー主義化→世界通貨体制の崩壊→世界市場の分断→帝国主義諸国の内部矛盾の激化→ファシズムか革命か」という図式がある。だがこの図式は世界構造の基軸について(1)ソ連の変質、(2)中国の存在、(3)後進国革命闘争の進展、(4)帝国主義本国における労働者の体制内化、

游撃

号 7

月一回発行

1975.5.15

定価 100円

共産主義者同盟
游撃編集委員会
東京都世田谷区千歳郵便局
連絡先 私書箱四号
振替東京〇一九五七八

今号目次

沖解同アピールに応じ、大衆的決起を

都学活再建の成果を踏まえ、反帝戦略部隊としての確定を更に推し進め、5・15沖縄闘争の大爆発をかちとれ…… 5P

社会主義学生同盟中央書記局
4・19集会の成功を踏え反弾圧戦線の強化とともに地区「破闖会」を全人民的に組織せよ…… 7P

組合主義的「早期妥結」路線と対決した教育社闘争を支援し、地区諸斗争を結合し固なプロレタリアの陣型を形成せよ…… 9P
「遠方から」グループに対する同盟の革命的「武器の批判」——沖田友士…… 11P

擊、游

的総括の上に存在するのであるが、たとえば、第一次ブンド第三次綱領草案が、次のような評価しか、後進国階級闘争に与えられなかつたのをみれば、ことは明白である。第三次草案はいう。「後進国における民族革命の中で自己のブルジョア的発展をとげようとする民族ブルジョアジーも必然的に國家資本主義的な方策をとるようになつた。プロレタリア運動はここでも明確に自己の権力の確立の任務に直面しているのである。植民地の民族革命運動も、本国のプロレタリア革命とともに、單一のプロレタリア革命を形成する方向にこそ勝利の道は開けるのだ。」

第一次ブンドが予想した如く、その後の事態は進展はしなかつた。
△インドシナ革命闘争の勝利△に象徴されるように△本国のプロレタリア革命△と結合されることを経ずしてもベトナム人民は勝利を獲得したのだ。われわれはこのことでもつて当時のブンドの「見透しの悪さ」一般をあげつらつてゐるのではない。問題とされねばならないのは、次のような式であるといふことである。スターリン主義の裏切りによる世界革命の挫折を前提にした上で革命全体の全世界的な不在を説き、そこから△帝国主義の論理△の絶対的貫徹を想定する発想である。そしてそこから眞の前衛党（本国のプロレタリア革命を指導する）の存在、つまりブントを抜きにしては、後進

國革命も勝利できないといふおそろしく、主觀主義的な式を生み出したのである。だから△帝国主義の論理△の絶対化の裏には△党△が秘そんでいたのだ。つまり、ここでは△階級闘争△が恒常に全世界的に、スターリン主義の裏切りにもかかわらず存在していふといふ事実性を承認することこそが問はれていたのだ。われわれが、三〇年代式に對して、持ち出した四つのメルクマールは、まさにそうちした△階級闘争△の現実性・事実性の問題なのである。そしてこうした△階級闘争△の現実性・事実性の問題との関連で帝国主義の諸政策が存在してゐるのだと云ふことを見抜かねばならないのだ。

こうした視点を抜きにするとき、二つの傾向への分極が不可避となる。すなわち、一つは、そうちした△階級闘争の現実性・現実性のみを美化し△連帶△と自己批判のみしか語り得ぬ立場——つまりは第一次ブント的主觀主義の裏返しへの移行か、さもなくば、そうちした階級闘争の現実性・現実性を承認することなく、そうちした△階級闘争を党派によるかといひ込みで持つて分断し、結果としては日帝の「同化」政策と同位相にしかならぬといふ立場である。

第一次—第二次琉球処分を否定的現実として把え、沖縄人民の民族的—階級的闘争と連帶し日帝の沖縄—アジア侵略を粉碎せよ！

われわれは沖縄問題をとらえるにあたつて、したがつて次の二つのことを念頭におかねばならない。一つは△今までもなく、日本帝国主義の路線と対決する沖縄人民の闘いの位相とその性格の問題であり、一つは、沖縄の客観的位置を規定するアジアの階級闘争の現局面の階級關係の理解である。そしてこの二つのことが、日本帝国主義の矛盾の現段階との関連で総体的にとらえられねばならないと云ふことである。

まずここでは、沖縄人民の闘いの位相を日本と沖縄の關係の問題を歴史的に明らかにしつつ、鮮明にすることから開始しよう。歴史的にみれば、日本—沖縄の關係は有史以前にまでさかのぼるが（南島文化圈）、①江戸期においては、沖縄は、サツマの植民地国でありつつ、徳川幕府、清に対する朝貢をつづけていた。②この時代においては（現在もそうだが）台湾との結びつきが強く、一つの南島文化圏を構成していた。③明治一二年の琉球処分によつて日本に合併される。④サンフランシスコ条約によつて日本から切り離されアメリカの支配下におかれ。⑤一九七二年に日本に「返還」される——といつた歴史的経過を経てゐる。こうした歴史的事情が沖縄の問題を複雑にしてゐる。つまり、沖縄は△日本△なのか否かといふ問いをこの歴史的経過は必然的に発つしてゐるし、それはいきおい△日本民族—日本国家△とはなになのかといふところまでいきつく。「國家」と資本制の関連の問題を問いかける。

△うまでもなく、沖縄の併合は明治一二年の大政官布告をもつて開始される。沖縄の併合は海洋民としてのアジア的生産様式下の沖縄の人民に生活とイデオロギーの転換を迫るものとしてあつた。だがこの過程は、上からの併合であり、天皇イデオロギーの外部からの注入△征服として存在した。沖縄の日本といふ「近代民族国家」への編入は、下からの封建的障壁の打破として行なわれず、「天皇の下における平等」として現実化していった。ヨーロッパにおける「民族国家」の成立は、一定の商品交換關係の発達の上に、一定の

地域の經濟的・社会的・文化圏が形成され、それを基礎にして、封建的障壁を打ち破つていく過程であつたが、日本—沖縄の「同化」の過程は、そうちした内在的な過程として存在したのではなく、あくまで、天皇イデオロギーの押しつけによる「異民族の同化」ということによつて行なわれたのである。したがつて、それは、その「併合」の当初から、すでに問題を内包したものだつたといふことができる。つまり、それは、一種の植民地でありつつ同化を要求されるという位置に立たされてゐたといふ。しかも、この「同化」が、たとえば、朝鮮併合等とは異つて、沖縄における民族主体の形成を徹底的に破壊つくりし、明治百年を通してより完全なものとして行なわれたが故に、沖縄と日本との特殊な關係を形成することになつた。われわれは「日本でなくて、日本である」といつた沖縄の帝国主義者によつてつくり上げられてきた位置を直視し、日本における反帝闘争の敗北の問題として主体的に把え、認識せねばならない。

しかも、この關係は、サンフランシスコ条約によつても、解決されるどころか、その關係がその關係として拡大再生産されていつた。日本は、いとも簡単に、沖縄を本土（日本）から切り離し、そのこどもつて自からの繁榮を築こうとした。つまり、「日本ではない日本」として沖縄人民を使つたのだ。そしてまた、七二年沖縄返還によつて、「日本ではない日本」としての沖縄の位置を利用し、自らの帝国主義的延命とアジア政策の道具に沖縄をすえようとしている。

こうした沖縄に対する日本帝国主義の諸政策の歴史的蓄積△「同化」という名における民族的支配は、沖縄人のものの解体として進行した。たとえば沖縄の金城朝夫氏でさえ「日本にきて朝鮮の民族衣裳を着た朝鮮人高校生をみて感激した。われわれも民族性を強調せねば」と語らねばならぬほどその解体は進行してゐる。また、アメリカ帝国主義に対する抵抗闘争が「本土復帰」を掲げねばならなかつたといふ事態にも、われわれは、沖縄人のものの解体をみてとることができる。

沖縄人民に敵対する「沖縄開発」＝CTS建設、海洋博を
粉碎し、沖縄人民の民族的・階級的形成を日本プロレタ
リアートの階級形成で応えよ！

(1) 沖縄——返還】以降、日本帝国主義は、先に述べた沖縄の位置日本であつて、日本ではなま一事を利用しつつ、日帝のアジア政策

ばかりなり

しかししながら、この金武湾の開発計画は、単にその一点のみから計画されたのではない。むしろ、ここで見ておかねばならないのは南ベトナム沖合から東支那海をへて尖閣列島に至るまで帶状に存在しているといわれる海底油田の開発を射程にいれてのことであることを明白に押さえておかねばならない。そしてまた、今回の海洋博も、沖縄をレジャーセンターにしようという「沖縄開発」の一環であることは自明だが、そうした海底油田開発を軸とする海洋開発に対する日本帝国主義のデモンストレーションであることもみておかね

(2)このことは、軍事的側面からみるならば、よりリアルに描くことができる。インドシナ戦争の勝利は、ヘインドシナショツクＶとし、流行語にみられるように、「アジア諸国の反共軍事政権を押しなべて」バニック状態におとし入れた。「反共」「反革命」の盟主としてのアメリカ帝国主義の位置は変わらないとしても、「アメリカ頼むに足らず」という空氣は、今や、反共諸国家の共通の認識となりつつある。アメリカ帝国主義は、アメリカ国防省筋の発言にもみられるように、その「防衛線」を大きく後退させることを宣言しようとしている。日本／フィリピン／ガム（ミクロネシア）といったラインへの後退がそれである。こうした「後退」がなにを意味するか明白である。アジア諸民族の民族解放の闘いを、抑圧し、反共政権を支えていた反革命勢力の中軸の後退は、当然のことながら、アジア

つまり、金武湾開発計画、——海洋博は、そうした日本帝国主義のアジア開発計画の一環としての位置をになわされてるのである。沖縄における海洋博が、日本の「優秀」な技術を中国をも含めたアジアの首脳に認識させることによつて、開発を有利に、しかも沖縄を根拠地として乗り出そうといふ日本帝国主義の壮大なる「開発」

③これから開発されるといふ意味でそうした後進国と同位相に存在していること、④またそれは、政治的・軍事的視点からいえば、米軍の統治下に存在し、その基地の役割を果たしてきたし、これからもその重要性を増すであろうが、日-米共通の基地であることによる東南アジアSEATO諸国のシンボルになり得るといふことなどを挙げることができる。

つまり、総じていえは、日本であつて日本でないといふ「沖縄」が近代百年間置かれ続けてきたところの、歴史的・地理的位置を積極的に利用して、アジアへの日本帝国主義の進出のためのシヨーウインドであり、基地にするための政策こそが、日帝の沖縄政策の本質であるといつてよい。

諸国における革命の前進を不可避とする。韓国の朴政権の露骨な反革命攻撃は、そうした反共軍事独裁政権の断末魔のアガキであることは明白なことである。また台湾政権は、向米一辺倒の外交から、ソ連と手を結ぶことによつて、△米一ソ▽一△中▽の勢力均衡の上に自からの延命をはかろうと姑息に動き回つてゐる。また、タイ等のSEA TO 諸国にみられるように、中国接近外交によつて支配の「安全」をはかろうとする動きも存在してゐる。

アメリカのアジアからの撤退は、こうした様々の波紋を呼び起しているが、そうした中にあって、日本帝国主義が立たされた位置も本質的には、東南アジア軍事政権と同位相である。アメリカの軍事力を背景に、自からの帝国主義的進出を遂げてきた日本帝国主義は今や、そのアジア政策を「独力」で展開することを余儀なくされる

がら、その政策の基調さえもつかむことができないといった極度な

混亂状況に立たされてゐる。「アメリカは韓国を守つてくれないのか、韓国にある日本資産の運命はどうなる」といった「心配」や、「釜山に赤旗が立つたら」とか「マラッカ海峡は?」とその動搖は

とどまるところを知らない。「とにかく、アメリカの大統領に会つて真意をたしかめねばならない」というのが日本帝国主義の現実の姿である。外相一首相の訪米が、インドシナの人民の闘いの勝利を目の前にしてあわただしく計画されたといふ事情はこのことを裏書きしている。また一方、金脈を追求されて辞任に追いこまれた田中派が、「日中國交回復を行つた」というただそれだけの自信の上に返り咲きを狙つてゐるといった状況は、日本帝国主義の混乱一動搖ぶりをたんてきに表現しているといえよう。

だが、いざれにせよ、日本帝国主義が置かれている立場からその政策の方向は明白である。①アメリカ帝国主義に哀願すること②アメリカの真意をたしかめた上で、それの範囲内において、日一外交を最小限に喰い止めるべくアメリカ帝国主義に哀願すること③アメリカの「安定」……新秩序体制を、日一中の霸權として確立すること、④日中両関係を牽制する意味での対ソ外交の展開、⑤日本独自の軍事力の増強を可能なかぎり追求することの四点

5・15闘争を突破口に、6・15、7・20闘争を闘い抜き、 皇太子派沖縄粉碎しアジア反革命闘争を10月天皇派米阻止闘争へと拡大深化せよ！

粉碎

(3)しかしながら、そうした「沖縄」の位置は、いうまでもなく、沖縄が、明治百年以来、置かれづけてきた位置を再び拡大再生産するものでしかないことは自明である。われわれが七〇年安保闘争において「沖縄の返還交渉」を「第三次琉球処分」といつてきたのは、まさにこの故であつた。いまでもなく、日本帝国主義は、明治十二年の琉球処分において沖縄を日本帝国主義に併合し、そこから、

台湾侵略 朝鮮侵略の道を歩みはじめた。またサンフランシスコ条約によつて、沖縄を日本から切り離すことで、アメリカの軍事基地を沖縄に主要には限定することに成功し、日本帝国主義の経済的繁栄のイケニエにしてきた。

こうした、日本帝国主義の政治的な沖縄の併合—切り離し—併合という路線は、その結果として、沖縄の日本へのかかわりを両義的なものとして、歴史的に形成してきたし、現在では、その両義性を積極的に利用し、日帝の文字通り前線基地に転化させようとしているのだ（軍事的かつ政治一経済的な意味において）。したがつて、そうした日帝の沖縄政策は、決つして、沖縄人民のためにならねばかりか、必然的に沖縄人民をより矛盾した存在へとおとしめるこ

とを結果せざるを得ないだろう。具体的にいえば、沖縄のそうした意味での前線基地化は、決つして、沖縄人民の手による人民のための産業を成長させることはあり得ず、それはますます軍事基地とモノカルチャーアの海洋開発の基地、レジャーランドといふ経済関係そのものを発展させずにはおかしい。そしてその結果、沖縄人民は、ますます、日本への従属と隸属を深めつつ、にもかかわらず日本人ではないといふ悲惨な状況に置かれざるを得ないのだ。よし、

他の日本の諸県との「沖縄県」を比べてみればその差は明確になつてしまつ、沖縄は、沖縄自身の発展の結集として工業化されてしまう。つまつ、沖縄は、沖縄人民が決定すべきことであるが、さくのではなく、高度に発展した日本帝国主義が、その専門化した一

に落ちつかざるを得ないだろう。

こうした四点を基調にする政策は、インドシナ以降、アジアの反共政権が押しなべてとろうとしている政策の集大成であり、アジアの「大国」—日本は、そうした政策を有機的—全体的に展開せざるを得ない。

したがつて、日帝の沖縄政策は、そうしたインドシナ以降のアジアの情勢を象徴するものにならざるを得ない。つまり、沖縄の米軍は日本の米軍ではなく「沖縄」の米軍であり続けること—すなわち、それは、東南アジア諸国を射程に置いた存在であることが、日本帝国主義にとっても、また、東南アジアの反共国家にとって要請されているのだ。ここでも、再び「沖縄」は日本であつて日本でない存在として位置づけられようとしているのである。そしてまたそれは、沖縄における日本の自衛隊の存在とその軍事的な位置もやはり、同様な位置に立たされることになる。そして、また、沖縄が、本帝国主義にとっても、また、東南アジアの反共国家にとって要請され、沖縄における日本の自衛隊の存在とその軍事的な位置もやはり、同様な位置に立たされる事になる。そして、また、沖縄が、そうした軍事的基地の役割をなうと同時に、先に述べたように「アジアの安定」—新植民地主義を象徴するものとして、平和のシンボル、開発のシンボルとして存在することが要請されているといつてよい。

諸問題との関連で、そうした綱領的地位を射程に入れつつ、日本帝國主義とアメリカ帝国主義の沖縄侵略に對して、沖縄人民が、一致して闘い、自からをそうちとした意味での民族的一階級的主体として形成していくことである。と同時に日本の労働者人民も過去の日帝に對する闘いの敗北を主体的に総括し、日帝の沖縄侵略に反対することによつて、相互媒介的に相互の主体形成を行つていくことが問わ

れているのだ。

沖縄海洋博への皇太子の派遣問題は、様々な意味で重大な問題を含んでいる。つまり第一に、先にものべたように、明治十一年以来の「第一次琉球処分」以来、日本は、その併合を天皇制イデオロギーによつてなしとげてきた。つまり、それはブルジョアジーおよびブルレタリアートをはじめとする他のブルジョア的意味での「自由」と「平等」を（せんじつめれば自由な労働市場を）反封建勢力の闘争によつて勝ちとつたものではなく、天皇の下における平等ということを利用して形成したのが日本の「近代國家」であつたという事情に規定されている。それは、沖縄人の闘争によるブルジョア革命といつては、天皇イデオロギーによる沖縄人民の解体としての併合であつた。（もし、この過程が沖縄人民自身の闘いと日本人の闘いの結合によるブルジョア革命として存在していたならば、沖縄－日本の関係性はブルジョア民族国家の形成としても、もつと別なものになつていいたであろう。たとえば、琉球共和国と日本共和国との友好関係として存在するか、それとも日本－沖縄の共和国連邦としての「連邦制」をとつていてあらう。）

沖縄の皇太子の「派遣」という事態が意味することは、したがつて、そうした関係性そのもの上に立つた、そうした関係性そのものを踏まえた上で新たな関係性を再生産するものを狙つたものであることを示している。沖縄人民にとつては、征服者としてのヘヤマトンチューの皇子が再びやつてくることを意味するのだ!! 日本の帝国主義者は、皇太子の派沖でもつて、沖縄が「日本の領土であること」「併合したこと」を沖縄人民に烙印するとともに、東南アジア諸国に對して日本帝国主義の復活を告げ、アジアにおける

遊撃

春期第一波政治斗争報告

都学活再建の成果に踏まえ、反帝戦略部隊としての確定を更に推し進め、5・15沖縄斗争の大爆発をかちとれ！

(一) 都学活の旗の下、革命派学生戦線、春期第一波行動を圧倒的に貫徹す！

社会主義学生同盟中央書記局

争派学生戦線として開始した。我々はこの一連の闘い、ならびにそれに先立つ旧二・六実行委総括から都学活再建へと至る過程での苦闘の中からいくつかの教訓を読み出し、わが学生戦線の更なる発展の一助としていくのでなければならない。

四月新年度開始をまたず、都学活は三・二破防法闘争を中心となつて牽引し、その中で自からを反帝戦略部隊として打ち鍛えていく闘いに着手してきた。この成果を引き継ぎ、各大學入学式への一斉情宣行動をはじめとした、組織的、計画的政治煽動戦へと、都学活は猛然と突入した。各拠点大学入学式において都学活は、反帝学生

る日本帝国主義が本格的にその総路線を遂行する宣言であるのだ。それはいうまでもなく、一〇・一の天皇訪米と密接不可分に結びついた、日帝のアジア反革命の一歩であることはいうまでもない。そしてそれは、いうまでもなく、沖縄の日帝の進出を足がかりとする進出である以上、沖縄人民の闘争と密接不可分に結びついたインドシナ人民の勝利と連帶する闘争として存在しているのだ。

われわれは、かかる視点の下に関東沖縄解放同盟（連）の呼びかけに応えて、沖縄人民自身の闘争と固く連帶しつつ、日本帝国主義を中心とするアジア反革命と対決し、インドシナ人民の闘争と固く連帶しなければならない。それは、いうまでもなく、第一、第二次の琉球処分を帝国主義者に許してきた日本ブルレタリアートの負の歴史的教訓を主体的に総括しつつ闘わねばならない。

そうした教訓を踏まえることなく、「復帰」運動の位相に埋没し、排外主義潮流への屈服を全面的に開始している第四インターを中心とする諸勢力との大衆的党派闘争を闘わなければならないことはいうまでもない。なぜなら、そうした排外主義潮流こそ、日帝の同化政策の補完的潮流に転化する傾向を内在化しているからである。まさにそうした潮流との対決こそ、第一次、第二次琉球処分を許してきた日本ブルレタリアートの主体的総括そのものであるのだ。

われわれは、「沖縄返還粉碎！ 海洋博粉碎！ CTS建設阻止！ 皇太子リ皇族の訪沖阻止！ 日米共同軍事基地撤去！ 関東総決起集会」を沖解同の呼びかけに呼応し、かかる視点の下で闘い抜き、「七五労災」「都学活」を中心とする日本ブルレタリア人民の大衆的決起を全人民的政治闘争－革命闘争の回路として形成しなかねばならぬ。

われわれは、五一五闘争を突破し、そうした革命勢力の結集を六・一五政治集会として準備しつつ、それらの闘いを沖縄人民とした七・二〇闘争へと拡大し、十月の天皇訪米阻止斗争に至る、日帝のアジア反革粉碎の一大高揚を主体的に準備するだろう。

五一五闘争を沖縄人民と連帶して斗い抜き、日帝のアジア反革命と全面的に対決せよ!!

運動の革命的復権を熱烈なアジテーションとビラに込めて、赤ヘル

業と同時に中央大学を中心として、春期政治闘争へ向けた圧倒的宣行動を展開し、次々とキャンパスを席捲した。新左翼諸党派の凋落と、党派軍団主義—課題学園主義、即ち今日的なテロリズムと経済主義のまん延の中にあって混迷する学生戦線で、都学活の「三つの核心、五つの課題」に貫ぬかれた、反帝戦略部隊建設と都学活への圧倒的結集を訴える主張は、全ゆる場所で新入生をはじめとした学生大衆の共感と支持を集めた。この煽動組織戦は、さらに「プロレタリア国際主義の旗の下、人民戦線派、排外主義と対決し、権力闘争—反帝学生運動の復権」と銘打たれたパンフレットを武器として、一層強化されるであろう。折から大攻勢に決起したヴィエトナム・カンボジア人民の勝利の雄叫びが、遠くこの日帝本国にまで到達するという、階級情勢の歴史的大激動のただ中にあってプロレタリア人は、明らかに反帝社会主義の声を求めており、この観点に立つた都学活の能動的煽動組織戦は、学生大衆をはじめとする人民各層に消し難い第一歩を印したのだ。

(二) 同盟分派斗争の切り拓いた地平に踏まえて都学活再建の革命的意義を打ち固め、春期第一波の全成果を反帝戦略部隊建設に投入せよ！

この反帝戦略部隊建設を訴える組織戦を貫いて息つぐひまもなく、都学活は、ただちに四・一九破防法闘争、四・二四新入生歓迎集会四・二八安保・沖縄闘争への組織を開始した。四・一九闘争に際して都学活は、神田一お茶の水一帯をステッカーでうめつくし、連日の情宣行動により、七〇年代権力弾圧の実態を鋭く暴露し、これと正面对峙をもつて権力闘争の闕門をこじあけねばならないことを強く訴えた。一方における、統一地方選—春闘構造の騒音の中で、真にプロレタリアートの権力を目指す者は誰であるのかを、人民戦線派、第二インター化諸潮流との拮抗の中で明らかにし、権力闘争への水路としての破防法闘争の意義を鮮明に訴えた。この成果は、抜いたのは都学活をも含めた同盟の影響下にある革命派潮流の規定力であった。更に都学活は、四・二四新入生歓迎集会を独自に組織現された。この結集を保証し、かつ集会そのものの保証を、完うし

集会は、まず事務局から、インドシナを中心とする階級運動の国際的発現を鋭く突き出し、「三つの核心、五つの課題」を基軸とした今春期における権力闘争派学生戦線、即ち反帝戦略部隊としての政治任務を鮮明に提起した。続けて、中大、明大、東大、早大の各拠点の戦線から、春期階級攻防へ向けての断乎たる決意表明を受けたこれらの発言の中で赤い糸の如く貫かれた、インドシナ革命の現実性について、さらに北沢洋子氏からの講演を受け、次に破防法一刑法闘争の意義について丸山照雄氏からの講演を受けて、都学活の政治路線への確信を深化させた。最後に、再度事務局から総括提起とスローガン採択を受け、四・二八闘争への圧倒的決起への決意を強く打ちかためて集会を終了した。

これら春期一連の一大集結環として、四二八安保沖縄闘争に歸り抜かれた。インドシナ革命勢力の民族解放—社会主義革命戦争の勝利の大進撃は、国際的を水準での階級的激動を作り出し、それにともなつて新しい安保沖縄闘争の意義を押し出した。都学活は、この闘いの意義を見据え、この闘いを全人民的政治課題として突き出したことによつて、後進国階級闘争の前進に直接的に連帯呼応する闘いとして打ち抜かれた。この闘いの革命的意義と、都学活の権力闘争派としての発展に正当にも恐怖した日帝ブルジョア権力は、都学活の部隊の到着の数時間前から会場の疊川公園一帯を、機動隊およ

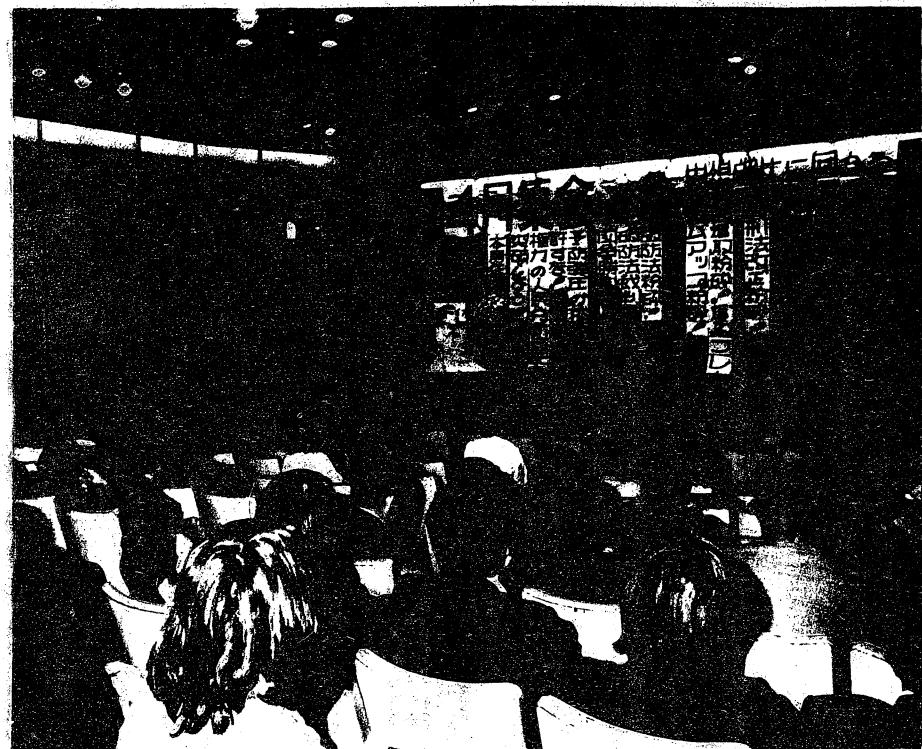
「政同」論的殘滓を引きずつてしたがゆえに、その反帝戦略部隊としての自己確定のためには激烈な革命的再編が全く不可避であつた。そしてこの試練は、同時にわ・社学同の、同盟一全総から二全総へと至る熾烈な党の革命過程もあつた。我々は一・六結成の当初から、N.R.大学間共闘的水準での結合を批判し、「戰略結合」を主導的に主張してきたが、昨秋フォード闘争における脱落逃亡分子の二・六実の隊列内からの発生という事実は、冷厳に我々の闘いのこの点での決定的不充分性を暴露した。それはさらにわ・社学同の党的主体としての転質における不充分性をも鋭く暴き出さずにはおかなかつた。われわれとの共同の戦列に立つた部分から脱落分子を発生させたことは、とりもなおさず、社学同の指導の敗北に他ならない。この指導の敗北は、当然にもあれこれの戦術的手直しによつて糊塗しうる類のものではなく、社学同そのものの革命に至るまで突き進まずにはいなかつた。

旧再建委における「党一大政同」論の母斑は、社学同にあつては、大衆に対してあらかじめ非公然化された党、即ち「見えざる党」という工合に形をかえて存在していた。これは「遊撃一号」社学同論文が、結局一・六実について一言も触れずに終始してゐることにも反映されている。長崎「党の発想とは何か」以来の、戦闘組織とし

以上報告した都学活の一連の闘いは、昨秋期フォード闘争をめぐつて機能停止に陥つた旧二・六実行委を、根底から総括しつくし本年一月六日結成—再建をかち取つた都学活にとつて最初の本格的な試練であつた。従つて、春期闘争の中間総括を提起するに当つて、都学活再建の意義を、確認することから始めなければならない。しかもこの作業は、都学活の主導的中核たる社学同にとつては、「党と階級との根拠は同一である」と言ひ切つた以上、旧同盟再建委からの一連の熾烈な党内一分派闘争と新党建設に至る「党的ための闘い」をもその視野に收めたペースペクティヴのもとでなされねばならない。

させたことは、とりもなおさず、社学同の指導の敗北に他ならない。この指導の敗北は、当然にもあれこれの戦術的手直しによつて糊塗しうる類のものではなく、社学同そのものの革命に至るまで突き進まずにはいなかつた。

旧再建委における「党一大政同」論の母斑は、社学同にあつては、大衆に対してあらかじめ非公然化された党、即ち「見えざる党」という工合に形を加えて存在していた。これは「遊撃一号」社学同論文が、結局二・六寒について一言も触れずに終始していることにも反映されてゐる。長崎「党の発想とは何か」以来の、戦闘組織とし



四・一九集会の成功を踏まえ、反弹 圧戦線の強化とともに地区「破闢会」 を全人民的に組織せよ！

この党の非合法性と非公然性との混同、レーニンの悪読みは、われ自身の政治発想の根底にまで喰い入つてゐた。この結果が、大衆戦線における様々な自然発生性をそれとして放置し、これとの闘いを回避してマヌーバーで大衆戦線運営にあたるという悪しき作風となつて定着したのであつた。大衆の自然発生性に拝跪し、それとの党の基準をもつてする相対化の努力を惜しむことによつては、決して大衆闘争の階級的自立を援助することはできない。それは逆に党と大衆とのもたれあい、相互利用主義を結果することでしかないのだ。この矛盾はフォード闘争において一挙に噴出した。社学同はその組織的力量の一切を賭けて、文字通り血のにじむような努力のすえに、この試練に打ち克ち、党としての転質をかちとることに勝利した。

旧二・六実の都学活への転位に際しても基本的には同位相の飛躍を要求されたと言えよう。都学活パンフに指摘された「共闘反対派の三つの傾向」はいずれも大衆運動における自然発生性の表現に他ならない。都学活は、これとの大衆的党派闘争を社学同の主導の下に計画的に組織し、多くの犠牲を払いながらもこの課題を果すことによつて自からの組織的自立を達成した。またこの都学活の飛躍を賭けた闘いに際しても社学同は、公然と都学活の指針を常に打ち出してきた。だが、ありうべき誤解に前もつて答えておけば、われわれは都学活を自からの機関系列下に置こうとしているわけではない

ことを言明しておこう。この種の大衆運動へのスターリニズム組織におさえつけ、同時に自然発生性を合法主義とともに党に持ち込んでしまうのだ。従つて我々は、都学活内における諸々の政治傾向の発生を否定しない。我々はこれらの雑多な傾向性に対して党の基準をもつて、ていねいに対応し、自からの主張を公然とおしだすことによつて、即ち大衆的党派闘争の推進によつて、都学活を権力闘争陣型の一翼へと組み込む闘いに勝利し抜くであろう。

かかる観点からする時、春期闘争一連の過程は、都学活にとっては、その組織的な革命的再編を更に強くおしすすめ、独自の反帝戦略部隊としての強化を克ちとする過程でなければならぬ。この点からする時、都学活は未だ少数派にすぎないことを我々はかくそとは思はない。しかしこの少数から始めて、確信をもち、正しい路線を組織的にかくとくするならば、必ず多数をかくとくできるのだ。

都学活の政治路線、即ち「三つの核心、五つの課題」として表現されるそれは、いくつかの点で補なわなければならない。とりわけ、沖縄闘争についてそれは急務である。（「游撃」本号第一論文参照）路線強化・組織的強化をかちとり、五・一五沖縄闘争を反帝戦略部隊として牽引せよ！

四月一九日、「四月集会—動乱」衆的反権力叛乱たる六九年四・一の時代・思想弾圧に向う権力を弾め、八の革命的意義と闘いの精神を再効する」集会は、権力と革マルの妨害をはねのけ、わが同盟をはじめとする三百名の革命的大衆の圧倒的結集のもとで闘いとられた。この集会は「破防法裁判闘争を支える会」と「破防法闘争を支える会」た系統的、体系的攻撃に対する反対的結集のものとで闘いとられた。革命勢力と革命思想の圧殺に向ける等の破闢会の呼びかけによる三・第二には破防法攻撃の狙いが革二破防法攻撃の拡大と闘う集会、命的党派と闘う人民との結合を暴デモに結集した部分によつて担われたことは、権力闘争の着実な前進で勝ちとられつつあることとし、明確に記憶されなければならぬ。

ところで、この集会の意義は次に権力といえども分離しないものとある。まず第一に、戦ものとしてあることを闘う革命的の諸点にあつた。まず第一に、戦の名において明確に確認する

排外主義、市民主義潮流の党派闘争を大胆に押し進め大衆的結集を!

第四には、その日が「韓国」における学生革命記念日というだけで、南朝鮮人民との連帯という全くアリバイ的、ペ平連的市民連帯集会に、セクトもたれ合い統一戦線で逃げこんだ部分との革命的分岐としてあつたのである。

この点は決定的に重要である。

つまり、この集会はなによりも印度シナ三国人民の革命闘争の圧迫的勝利を背景としつつもたれたこと、すなわち、米ソを基軸とした戦後世界秩序の崩壊と新たな再編のなかにあって、日帝自身がアジアにおける再霸権—アジア人民に対する予防反革命攻撃—アジア

反革命新秩序の形成を主体的にも担い切ることで、今日における権力の攻撃がまさにそうした世界的、アジア的な規模での階級闘争そのものの反映として系統的に打ち出されていること、

そしてまさに「韓国」の戦前の治安維持法そのままの、治安刑法の暴力的制定（国外での、つまり日本での「韓国人」の反朴言動をも取締ることなど）にその質を先行的に表現されている点をこれらの部分は全くみていないからである。われわれは予防反革命攻撃をたんに、攻撃の強弱の差という数学

的範ちゅうで決して言つてゐるのではない。それは世界階級闘争が文字通りの意味において「革命と反革命」に構造化されており、ベトナム、カンボジア等で明白となつたように、ブルジョア民族政權であれ、予防反革命体制をもつて

され、予防反革命攻撃をもつて

においても、それを市民的人民戦犯罪的活動を展開しているなかで、とりわけウニタ弾圧に対する対応する傾向が広範に存在するなかで、あります。

こうした潮流や傾向に対する革命的人民からの回答としてあったの意義は、いつたのであり、ただたんに破防法裁判を支えるとか、革マルが「支える会」との共催と本多氏追悼がはいつていることをもつてヒステリックに中核とその同調者の集会に無理やり意味づけた内容ではなかつたのである。的はずれも度が過ぎているといわねばならないだろう。

の闘いの教訓をかなぐり忘れ去り、

ところで、以上の意義と位置付

ではない。それは世界階級闘争がこれに加わるか、その入口に立つけをもつて集会は四・一九裁判の

ではない。だから事態

で、われわれはただ事態

5号目次

- インドシナ三国人民の革命戦争に呼応し、帝国……1
- 主義心臓部にプロレタリアートの戦闘陣型を構築……6
- 世界階級闘争の現段階と革命派の任務
- 権力の「革命思想—勢力」への強圧に抗し、武……6
- 装闘争の地平を強化し防衛せよ ウニタ弾圧……6
- 破防法弾圧反対三・二闘争闘わる
- 地区住民一日雇労働者の闘争に呼応し、帝國……1
- 市従労組Ⅱ本工労働者の闘いを全人民的政治闘……8

七〇年代帝国主義の大學生物理的「解体—新設」

- II中大の多摩移転を粉碎し「神田」解放を闘い……14
- 明大・中大闘争の中間総括(下) 社会主義

争へと組織せよ 「横浜新貨物線」「寿地区的労働者」の闘いの位相と地区労働者会議の任務

- 昨秋期闘争の地平を踏まえ、「乃勞実」を大衆的……11
- 権力闘争機関へ改編せよ!! 一二・二八七五労実春季政治集会開催さる

組合主義的「早期妥結」路線と対決した
教育社闘争を支援し、地区諸闘争を結
合し強固なプロレタリアートの陣型を
形成せよ！

教育社開革の現時点と報告

解雇撤回、職場奪還の戦斗的労働者運動を一特防テロ体制として権力・資本のむき出しに四年間に亘つて斗い続けていたる教育社斗争の暴力的弾圧体制として強行していくたので現局面とその方向性を明らかにしていきたい。ある。この様な資本自らのブルジョア法秩序

教育社資本は、小・中・高校生向けのトレーニングペーパー・社会人向けのコンピューター講座等の出版物を応募した会員にダイレクトに送り、それを逸脱した弾圧形態は、日帝の権力支配が依然として現存する形で、拠出した戦後支配秩序の枠組みを自ら乗り越えようとするものであり、反戦青年委運動とその

クトメールで販売する企画として、学習塾経営から六八年設立され、七〇年には年間二〇億もの収益を上げるに至つたのである。この以來の戦斗的労働運動潮流の登場に対する帝^日資本の側からする死活をかけた対応としてあるのであり、更に国民統合基軸の重要性

教育社資本の急成長は、労働者に長時間労働等劣悪な労働条件を強制し、社員一二〇名の内六〇名が虐待労働者であるとへう労働者で、労働するものとしてあるのだ。この様な、階層である労使運命共同体思想へと労働者大衆を繋り込み、帝国主義排外主義政治構造へ

対する分断支配を最大限に利用し、労働者収奪を徹底的に遂行したことの結果である。と司寺で、このことはまた、学文教育―社会教戦斗的労働者運動を展開するもので対しては級解体―協調体制に組みさず、権力の階級支配再編に坑して、階級的原則を堅持し斗い抜く

育を貰ぬく労働力資源の再編・再利用を支配——文字通り権力——資本一体となつた強権的暴力——再編の重要な環とし、資本の要請する労働力——的圧殺が企てられるのである。

資本一体となつて展開していく、日帝の要請に応えるものであつたのだ。

無期限スト体制を堅持し大衆的実力斗争を軸とし「資本の労働者弾圧は一切許さない」という誓認ること、早急に日本政府に譲り受けたのである。

この核がわざの中で、十五年春草木の倒産組合は結成されたが、労働条件の劣悪さを起動力に急成長をとげた資本にとつては、労働組合はスローガンに戦闘的な実力斗争を展開して、ついで、資本のブルジョア法秩序を逸脱した。同年五月には、労働組合は、労働者第三回討伐隊、地区讨伐隊、区域自尊部

の存在は容認出来るものではなく、公然たる、衝突に對し、地団劔等、既成指導音をもつて、組合弾圧を準備させるものであつた。

の連續から 同年九月の本社移転を軸に企業半斗争重点の早期解決路線は 大衆美濃の斗争路線を否定し、労使「正常化」策動へ 屈服として結果せざるを得ないが故に、そ

た組合室の社外追放・一二月臨時労働者七名の不当解雇・一二月官憲導入・特防暴力ガードマン常駐からロックアウト・翌一月正社員一〇名の不当解雇と、まさに組合活動家パー ジと組合圧殺とを、権力—資本—非組（二組）の不¹当解雇・一二月官憲導入・特防暴力ガードマン常駐からロックアウト・翌一月正社員見られる早期解決路線は、労働組合を帝国主義政治に屈服させ、労使正常化に名をかり、労働者抑圧構造へと転化せんとする帝国主義政

されている。

また、権力—資本—特防テロ体制との実力対峙は、労働組合の結合内実を斗争体として打ち固めなければならず、自衛武装をも含めた組合員の斗争主体としての自立化を勝ち取らねばならなかつたのである。この斗争体への結合内実は、生活・斗争資金のブル制、共同アルバイト体制、班一組一隊という斗争形態として実体化されてゆかねばならないのである。

既成労働運動と運動組織的に分岐した支援共斗の持続化と拡大は、地域治安体制を実態的に統轄する警察権力が、資本と文字通り一體となつて敵対することを意味していた。この間の資本—特防テロ体制との対峙から警察権力との直接対峙への斗争局面の転換は、戦斗的労働運動に対する刑法改悪・予防反革命の実質的先取り攻撃として、権力による強権的・計画的・政治的弾圧の実態を示している。この斗争圧殺としての弾圧の強化は、帝国主義支配様式を戦後の支配秩序の解体の上に、合法的イデオロギー形態として物化されるべく強行されており、破防法を頂点として刑法改悪、保安処分体制として意図しているものである。階級関係を国民関係に転位し侵略反革命の排外主義動員体制に向けた攻撃として戦斗的実力斗争が鋭く突きささつている事の組織化にとつて、階級的原則に貫らぬかれた

遊 撃

必然的対応であるのだ。即ち、帝国主義支構造の展開が、戦斗的労働者、住民活動家等

配再編の基軸をなす行政権力の機能的強化は、行政機構の経営体化等資本制的合理化の貫徹遂行する際、従来の（既成戦線の位相での）運動からの飛躍として内実化させ具体的組織形態として実体化されてゆかねばならないのである。

すでに明らかにした様に、教育社斗争は、性格は、当該一支援の関係から、大衆実力斗争をもつて、大衆斗争機関へと地区結合を行っている現在の階級関係総体に教育社斗争をもつて、大衆斗争機関へと地区結合を行っている現在の階級関係総体に教育社斗争の徹底化をその運動的枠組みとして出発しつつも、大衆実力斗争を貫徹することによつて戦斗的労働者運動を形成させたのである。また、その斗いそのものが、権力—資本の階級支配再編、即ち、現在の階級関係—階級斗争の到達地平とその質に規定されているが故に、不可避的に個別改良斗争の徹底化といふこの戦斗的労働者運動、部落解放運動、行政斗争を射程に入れた住民運動等の既成の運動諸形態から鮮明に分岐した諸運動体の結合が、徐々にではあれ形成されつつある。

現在、戦斗的労働者運動、部落解放運動、行政斗争を射程に入れた住民運動等の既成の運動諸形態から鮮明に分岐した諸運動体の結合が、徐々にではあれ形成されつつある。この戦斗的諸運動体の結合の開始は、権力の肥大化、予防反革命としての保安処分体制、更に帝国主義の高度成長の破綻によつて惹き起された資本主義的生産関係の矛盾を積極的に分担する帝国主義社民の排外主義的潮流等の根本的誤謬の解体止揚の位相

に、現実的に弾圧体制そのものとして機能して組織化され、敵対している事を示している。構造化され、敵対している事を示している。個別争議の運動展開においても、この重層的支配構造そのものとの全面的対決を回避して、重層的支配構造の拡大・深化に向け強行しているのである。

教育社斗争の切り拓いた拠点としての政治的対応との対決を不可避とする斗いである。すでに明らかにした様に、教育社斗争は、性格は、当該一支援の関係から、大衆実力斗争をもつて、大衆斗争機関へと地区結合を行っている現在の階級関係総体に教育社斗争の徹底化をその運動的枠組みとして出発しつつも、大衆実力斗争を貫徹することによつて戦斗的労働者運動を形成させたのである。また、その斗いそのものが、権力—資本の階級支配再編、即ち、現在の階級関係—階級斗争の到達地平とその質に規定されているが故に、不可避的に個別改良斗争の徹底化といふこの戦斗的労働者運動、部落解放運動、行政斗争を射程に入れた住民運動等の既成の運動諸形態から鮮明に分岐した諸運動体の結合が、徐々にではあれ形成されつつある。

現在、戦斗的労働者運動、部落解放運動、行政斗争を射程に入れた住民運動等の既成の運動諸形態から鮮明に分岐した諸運動体の結合が、徐々にではあれ形成されつつある。この戦斗的諸運動体の結合の開始は、権力の肥大化、予防反革命としての保安処分体制、更に帝国主義の高度成長の破綻によつて惹き起された資本主義的生産関係の矛盾を積極的に分担する帝国主義社民の排外主義的潮流等の根本的誤謬の解体止揚の位相

同盟政治論機関誌

ボルシェヴィキ 創刊号

根本的視座の開示
に対する我々の革命的批判

(10) 1975年5月15日発行

同盟二全総政治報告 I
（新党結成）の分歧と軌跡

（同盟8・5一全総の革命精神の立場とその地平
戦闘の実力斗争が鋭く突きささつている事の組織化にとつて、階級的原則に貫らぬかれた

（同盟建設における 総括的視座
位置と任務
同盟二全総政治報告 II
（長崎前衛論—叛乱論）と同盟の綱領—組織—戦術（総路線）の

（私党）一大政同論路線の根底的解体止揚の地平
潮流への改編
（革命的階級戦線における学生運動の今日的任務
都学活をプロレタリアートの陣型の革命的翼に改編せよ（他）

「遠方から」グループに対する同盟の革命的「武器の批判」

沖田友士

(一) 遠方から一号の正木論文 (我々の政治的立場)の八 ツ当たり的批判の低俗性と 無思想性

「遠方から」の第二号に於いて、「我々の政治的立場」と云うタ

イトルを付した正木論文は、主要には杉山批判という形態を通して、

我が同盟の誹謗中傷を心情吐露的に書きなぐつてゐる。このような

低水準の政治暴露文に対し、具体的事実関係その経過に到るまで、

こんせつていねいに反証、反論を擧げる程サービス精神は残念ながらわれわれは持ちあわせていない。しかしどのように無内容な批判

であれ全く無視することはまだ許されない。しかし「帝国主義との

闘争は、もし日和見主義に対する闘争と不可分に結合されていない

なら、空虚で偽りの空文句に過ぎない」というレーニンの権力闘争

と党派闘争の一体的展開といふ視座に立脚して、昨今の遠方からグループの主張と政治内容の小ブル的中間主義、日和見主義の本性を

より一層あばきだすことでも我が同盟の階級的責務の一つであるとい

う把握と視点に立つならば、一定の見解を提示しおく必要はあるだ

ろう。

今日に至つては、わが同盟と遠方グループとを直接比較するなら

ば、現下の階級闘争に果してゐる役割は、天と地との差があること

はもはや明白な事実である。このことは革命的諸党派、諸勢力に対する一定の規定力といふ点に限定しても明白なことである。したがつて「遠方」にのせられたような三文評論の発表は彼ら遠方グループのその存在根拠を、その貧困さを証明することにしかならないのは衆目の一致するところである。もし彼らがかかる無内容な批判をもつて、我が同盟の内的動搖を画策せんと願望しているのであれば、それは全くの「無償の行為」であることを忠告しておかねばならない。我々はすでに、八・五一全総の革命的精神の立場を踏まえ、更に同盟一全総を組織當為として獲得し、旧再建委の党(私党)一大政同路線の解体止揚を、同盟の綱領一組織一戦術の肉化として、すなわち党建設の第二期として獲得した。より具体的にいふならば、党の改組、整風を通した指導部建設と細胞建設(地区労政同、学生細胞)および、昨年の末の破防法と闘う会の結成を獲得し、その軸を我が同盟が担い、かつ、三・二ウニタ弾圧!!破防法弾圧の拡大と闘う集会を領導し、その成果の上に四・一九集会をして圧倒的に成功させたのである。そして本格的に地区破闇会の大衆的建設に着手している。また昨年の第三回全労交集会、更にフォード闘争を契

機に生起した七四労実委、都学活における分岐の政治的質を主体化し、その血の教訓を、権力闘争における党的戦闘の陣型の形成として結実させてきた。それは大衆的権力闘争、党派闘争を具体的に担う潮流の形成に現実化であり、遠方グループの「私事としての評論活動」とは実践的に雲泥の差をもつてゐる。遠方グループの実践は、いふならば「川崎幸」病院の利害に基づく川崎市役所(自治体)と医療行政との関連で、社会党の○○候補支援の市議会選挙を「幸」病院の患者さんを票田としての活動を行つてきた、ということ、茨城県知事選に於ける東風出版社石川次郎(無所属)地方党結成準備会推薦の選挙応援といつた類のものでしかなく。

我が同盟は昨年の党内分派闘争以降、自己批判―相互批判、更なる団結の作風の確立を基礎に、全党的政治討論の組織化と対象実践活動に於ける組織思想の内実化を通して、党に対する責任の鮮明化を命がけの主体的飛躍として獲得してきたのであり、このこととは自から階級的責務の上で彼らの実践とは重大な差異を呈してゐる。その過程に於いて我々は旧再建委が色濃く宿していくところのその思想的・組織体質としての政治的投機主義的傾向や、情況派政治と称されてきた政治の巾の広さ一般にすべて解消して行く傾向を総括し克服して來たのである。まさしく同盟の政治的立場は旧再建委の単なる「継承發展」ではなく、第二次ブンドの分派闘争、再分裂に規定されている旧再建委の部分性を突破し、具体的普遍的立場へと到達し、新たな革命的同志を含めて形成して來たのだ。かかる不動の指導の確信こそ、我々の今日的団結の基礎であるのだ。我々のこうした痛苦な道程など彼ら遠方グループのサロン左翼諸君には到底理解しがたい事であろう。

とくに正木氏はこのことに全く無自覚である。そうであるが故に我々を旧再建委の延長上の存在として意識することによつて、その位相で批判せんと必死になつてゐる。が、そうではなく、まず正木氏は、何よりも今回の分派闘争―党派闘争に於ける自からの組織的日和見主義的及びその中間主義的立場から招いた冷酷な結果、その主体的敗北を強引に隠蔽し、自ら良識ある大人と演出することによつて、自己瞞着に陥つてゐることを痛苦に自己批判すべきなのだ。そのことを抜きにして、分派闘争以降、約一年近くなる今日になつて再び過去の水準へ党派闘争をひきもどすなどとは、全くの主観的願望といわねばならない。とはいき、彼の見解を批判することは今日の時点においてはこうした発想が生み出されてくる内的根拠を切開するといふ意味において、それは我々にとつても反面教師的役割を持つと同時に、また彼らにとつても自己の階級本質が何であるか鮮明にさせる意味で必要なことだろう。

したがつてこゝでその点にそくして若干明らかにすることにしてしよう。まず第一に昨年の分派闘争がその基本的性格において、非和解的対立として存在したこと、すなわち、分派へと到る過程で自らが

準備してきた政治的本質に無神經であることが、何よりも正

木氏の悲劇の出発点であつたのだ。つまり今回の分派闘争の直接的発火点としてあつた「山口武秀批判」、すなわち「高浜入闘争」を

巡る問題の対立は、決して一般的に路線上の対立として顕在化した

ものではないところに根本的問題が秘められていたのである。そこ

においては山口武秀氏の指導路線を批判するのか、しないのかと云う工合に、きわめて保守主義的に問題がたてられたことでは

なく、「批判」することを通して何を獲得するのかがとわれていたのである。これが一切の分歧を決断させる直接の契機であつたのだ。

この点に関してはすでに『遊撃三号』の山下誠論文に於いて明らかにしてあるので詳細にわたり触れることはしない。が、最底限押え

ておかねばならないことは、旧再建委に所属していた同志であれば周知の如く、山口武秀の大衆闘争路線は、ROT機関誌紙上に於いても、又大政同路線の提起にあたつても、我々の「大政同論」の見

本であるといふ程過大に評価されていたことである。だが、それにもかゝわらず、火野本人氏が東風社の出向社員となつてから

一挙的に武秀批判が公然と開始されたといふ事実は一切を物語つてゐるのである。

我々は山口武秀氏の高浜入闘争の路線を無条件に擁護することを主張したことではない。我々が主張した点は「運動総体の具体的な發展段階と同盟の組織戦術との関係において、直接に山口武秀氏の闘争路線批判を行うことは、高浜入闘争の後退をもたらすだけであり、仮に批判を展開するとしたら、具体的闘争の戦術展開とそれへの主体的かゝわりの中で批判すべきである。」といふことであつた。こ

の問題に関して正木氏は、全て杉山同志のデマコギーによるストーリー演出に同盟総体が引き込まれてしまつたといふ次元でしか問題をたてようとしていない。事実無根のデマコギーで同盟を組織したのが杉山氏であり、それはひとえに彼の勝手な推理と想い込みによるものだといふのである。そしてその裏付けのために正木氏は歴史的提造をあれこれとおこなつてゐるのである。が、どう考えてみても、これでは余りにも話が出来すぎているとは誰しもが直感的に感じるところであろう。少なくとも第二次ブンドの系譜を踏む一党派の分派が何んの内的根柢もなく成立する筈がそもそもありうるはずがない。もしかする分派が成立するとするならば、それはスターリン主義以下の彼らの好むナチのファシズム政治でも導入しない限り、その論拠を主張しきれない。だが、かゝる形で分派されたと主張し、歴史的捏造までおこなつて、あくまで自らの階級的本質を隠蔽しようとする意図こそ彼らのファシスト的本質を証明している。

彼ら遠方グループは「大人の政治」を口先では唱え、旧来の階級闘争の構図の常識の解体を語り、実践的にはその指導を具体的に貫徹せず、常に責任を持たない位置に逃げこみ、他人の土俵で相撲とることばかりに専念していたのだ。これがまさしく社会的良識ある「大人」の政治の内実である。彼ら自身の招いた指導の責任には一切ふれず、たゞその結果の事態に悲しみ、不明をはじると云う演出を行なつてゐるのである。そしてその夜間飛行は新左翼グットバイ路線を掲げて、死んだふりをしてみせたが、とことん死に切ることに思想的価値を見出すほど、根性もバトスもない。それ故に遠方から一号においては火野本人以外が死んだふりのボーズをとりつゝも、アリバイ的予防線として雑誌「東風」に於いて彼らが好んで嫌う左翼芸能界の主役としてキャンペーンをおこなつたわけである。

(12) しかし我が同盟「遊撃」三号に於ける「ブルジョア政治への屈服の道、遠方への旅立ち祝して」という彼らへの批判を読み、「自民党」

と同位相で扱われることは余りにもひどすぎると、自己嫌惡的悲鳴

をあげ、日がたつにつれてヒステリーの度は、ますます高まり、何としても泥試合に持ちこまねばと決意して開示されたのが今回の正

木論文の政治的位置であるのだ。

正木氏は杉山同志との一五年來の党友關係における引きさかれた感情を、病院の理事長であり、かつ医師である職業的規定性から思いついた手法で、精神分析風に杉山同志に対してもやこれやと政治意味付与することにより批判が成立してゐるつもりになつてゐる。

だが、これも何んの核心をついたパンチ力はなく、自己のとりのこされた、遅れた位相からの批判でしかないのだ。

(二) 同盟の政治的立場からの批判

旧P.B多数派へ篠田一東風の「高浜入闘争」をテコとして打ち出され、党財政の物質基盤の獲得、「党の骨格」路線は、全国各地に於ける東風支社建設とだきあわせた全国各地区の支部建設プランである。それはその理論的基礎、背景としての長崎前衛党論(私党)

の完成と三身一体的に打ちだされたものであつた。したがつてそれは、その党的立脚点及びその思想的体質までに立ち入り、その根拠を切開することをぬきにしては、その革命的解决、止揚を見出すことが困難な問題として存在したのである。彼らに對しわざかの妥協も譲歩も許すこととは同盟の解体と死をもたらすことになるといふ。さきわめて正しい革命的危機意識をわれわれの自らの主体の危機として受けとめたのだ。したがつて我々は当初から全党内闘争を系統的にかつ大胆に、党中央集権化構想の具体的展開のもとに於いて展開したのである。それは旧再建委のフランクの前史の位相がその地平まで到達していかつたことの自己批判的総括を明らかにすることによって行なわれたのだ。しかもそれは革命的分派の結成として、党内分派闘争一党派闘争を組織に持ちこまれた階級闘争としてとらえ返しつつ行なわれた。「もはや解決はたゞ一つあるのみ。分裂以外になし。くされきつた同盟を立て直すにはそれ以外の方法はない。」といふ発想に秘そむ、単純別党コースの解党主義的傾向を克服しきるが、それは革命的危機意識をわれわれの自らの主体の危機として受けとめたのだ。したがつて我々は当初から全党内闘争を系統的にかつ大胆に、党中央集権化構想の具体的展開のもとに於いて展開したのである。それは旧再建委のフランクの前史の位相がその地平まで到達していかつたことの自己批判的総括を明らかにすることによって行なわれたのだ。しかもそれは革命的分派の結成として、党の改組を底に、單一党的建設の獲得を目指し、旧再建委において一つの傾向としてあつた、算術的結合によるブンド再建方式、かつての「統一」ブンド的な限界性を根底的に止揚するものとして党内分派闘争一党派闘争を基本的戦術として確定しつつ行なわれたのである。このことを実現しなければ、きたるべき本格的権力闘争を担い闘いとすることは出来ないといふ視点に立脚するがゆえに、我々は革命的分歧を一点の曇りもなく決断、決意させたのであつた。

しかも我々は旧P.B多数派を単なる指導の崩壊として位置付けることなく、「革命的翼としての指導とその建設か」、「ブルジョア政治に屈服し、階級的利害を売りわたす指導とその指導部、それに追隨する部分との指導かといふ分裂として能動的に位置付け、何が同盟を組織的、思想的危機においこみ、また変質させよとしているのかを鋭く見ぬき、死活をかけた分派闘争を通して、勝利的前進に導びいて来たのである。以上の如くもはやブンドの赤い血を一滴も含み合せていない左翼プローカーに転身した「遠方」グループの走資派腐敗分子に対する我々の革命的党の精神の立場こそ八・五一全

私的側面を自己純化させ、長崎同盟CC解散文章、S氏のK氏への手紙（SET&6的内容）更に旧同盟議長（松本礼二）の同盟指導権のゼン譲路線と正木氏の情況誌へ武秀批判の原稿をのせること

が問題が解決する道であると最後通牒的喝喝等の多様な戦術を駆使して、我々との対決を回避することを通して、我々の内的自動崩壊を意的に期待したことに対するものである。この様なかたすかし路線の操作は、全く自らの指導の責任を果たすという党と階級に対する共有性の一かけらもなく、この無責任な「大人の政治」こそまつたくマヌーバー政治でしかないことはもはや自明である。

更に正木氏は今度は我が同盟に對して身勝手な主觀的に思い込みを行なつてゐたのである。すなわち当初は「あと半年、何んとか持つてくれる様に願う」と公然と発言していたのであるが、そして一方で種々の同志に對する中傷を行ない、同盟に對して分裂幻想を期待していたのであるが、しかしそれも結局は自分達のなぐさめでしかなく、我が同盟は半年どころか増え強固に打ちきたえられ、強化されてゐるといふ革命的現実の前にその彼の思ひ込みの幻想がより確実に破産したことに気がつくや、一転して無内容に我が同盟に對し敵対と粉碎のおたけびをヒステリックにあげているのである。そして今ごろ何んで遠方からなのかと云うことを必死になつて政治的意味付与を行なつてゐると云うことをみればその事が端的に表示されているのである。更に、彼らが好んで嫌う新左翼芸能界体質云々は、「読書新聞」のコラムにのつた「遠方から」の批評がよほど気にならしくて、あれこれと批判してゐることをみても大人の政治の終末路は明らかであろう。

さて何よりも正木氏の混乱の原因は、我々を旧来の様に大政同に於ける同盟の大衆的実践活動家のレベルとして把握しているところにあるのだと云うことをえてこゝで指摘しておくことにする。ここで再度要約すれば、8・5・1全総の革命的党的精神の立場は、現在においても根本的に貫かれてゐるのである。何よりも我々が当初根本的に問題にしたのは、無規定な私党論、その思想的背景になつてゐるのである。更に、彼らが好んで嫌う新左翼芸能界体質云々は、そのヘゲモニーに介入することが原則とされた場合、マルクスのフランス革命の三部作の一つである「フランスの内乱」において明らかにされていることとくプロレタリア階級は、旧い国家機構（ブルジョア権力機関）をそのままプロレタリア独裁の機関にとて代えることも、單にえかえることも出来ない。この様な古い抑圧機構をすべて取り除かねば、プロレタリア人民の権力は樹立できないと云うことであり、ブルジョアジーとその代弁者とその一分派との密月として高浜入闘争のブルジョア的集約のために、闘争の弱体化を山口武秀批判をもつて画策し、その代價として資金をあずかり、その資金で党的骨格形成を行なうことがいかなる結果をもたらすかはおのずと明らかであろう。権力に許容された合法主義的日和見主義党派の存在を容認することであるのだ。そのことは單に補完的役割を果すのみならず、究極的にはプロ大衆に敵対するものである。すなわち党建設の問題で権力問題（綱領問題）と階級基礎との関係をまったく捨象することは、ブルジョアジー、及び小ブルジョアジーの別動隊かつファシズム的政治盟約集団に転落する本質が内在化しているのである。我々は彼らの本質が権力問題からの召還主義的解党主義であり、我々はこの様な部分との訣別は、階級の先遣隊としてあらんとするかぎり当然である。我々の目先の小ブル的利害での原則の取引に応ずることは、絶対に許しえないのであり、こゝに我々

の革命的解答があつたのだ。

この党と階級における共有の原則とレーニンがのべてゐる「信頼できない部分と共同の闘いを組織することを恐れることは、自からきわめて歪曲して把握しているのである。我々は結成した新党の基準は、まずもつて自らの党的主体としての組織思想の内実化として問題であることはまずもつて明確にしておかなければならぬのだ。

何故ならば遠方グループの諸君はレーニン主義を政治・技術として対象実践活動を一切の出発の原基形態として創出することであつたのであり、この様な我々の党建設の血の教訓をまったく理解することは出来ない正木氏は、すでに使いつくされた古い言葉であるスターリン組織論への転向等と無内容なレッテル張りを行なつてゐる。更に杉山と情況出版と云うタイトルまで付けてあれこれと批判を姑妄根性で展開しているが、無内容極まりないのは当然としても、他人のことより我が身のことを考えてみたらどうかと云いたくなる。昨年秋、擬制的人民病院粉碎と云うスローガンの下に幸病院の第二労組が結成され、その部分の改良的要求をすべて拒否し、第一組合をだきこみ、第二労組メンバーを全員解雇し、その闘いを圧殺し集約したと云うことをみてもわかるごとくこれが彼らの姿であるのだ。そして神労活においてこれが問題にされ、その闘いの支援共闘を組まれることを恐れ、種々の政治工作に奔走してゐたと云うことは明白な事実であるのだ。たゞけぼろの体であることをまず持つて自覺すべきであるだけを忠告しておこう。

以上紙面上の都合によつて今号においては遠方グループの政治的批判を正木論文の位相を含めて提起したのであるが、「遠方」二号の遠方からの手紙のコラムの中で、咲谷氏が「論争上のどんな泥試合にも応じるという政治上の「仁義」」をはたすことなどをねきに、彼らの将来を評論することは政治集団には許されぬ。この論戰は我々と彼らの性格を将来決めて行くであろう」と提起されているが、誰れかに強要され、決意して書いたかは別としても、この咲谷氏のいきがりを我々はとりあえず歓迎することにしておく。「遠方」一号では「私党」論はすべて引こめ、大政同のみを再強調し、新左翼の病理II負の側面だけを取りだし、新旧左翼の終えんを掲げ、六〇年後半から七〇年初期にかけての階級闘争の歴史的到達地平とその主体敗北の地平は何んであるのかを捨象して、あれこれと評論しているのであるが、遠方から二号においては、より変質的純化をはかり、「新しい国民運動を、日本革命を基礎にすえよ」と云うタイトルで二大階級の食い逃げ論をモチーフにして提起されている点を踏まえながら次号において(2)正木論文の同盟に對する組織的批判の低水準とその自己破綻と云う題名のもとにその内在的批判を展開することにする。更に八号において、新国民運動論なる全体系を根底的に批判することを約束して今回はその前哨戦として批判と我々の政治的立場を鮮明にするにとどめる。